



TITLE:

(随想)信州随想

AUTHOR(S):

柿崎, 勉

---

CITATION:

柿崎, 勉. (随想)信州随想. 泌尿器科紀要 1961, 7(6): 635-636

ISSUE DATE:

1961-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112156>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 7 卷 第 6 号

昭和 36 年 6 月

随 想

信 州 随 想

信州大学教授 柿 崎 勉

最近この松本市に赴任して来た。ここは私の故郷に近い幼な馴染みの土地である。丁度若葉の季節で、新緑の山々が周辺に起伏し、西方にはまだ白く輝く残雪を戴いているアルプス連峰が屏風の如く屹立している。都会人の山岳への郷愁をそそるに最適の時期であり、眺めであろう。私はこの近くに育つたとは云え、既に30年近くもこの地を離れて過して来たので、この土地の現在の風物は幼い時に印象付けられたものと完全に一致するかどうかは大いに疑問である。これから新しい目と皮膚をもつて見、且つ感じてこの風物を再認識することになる。

由来信州人の気質については様々の毀誉褒貶がある。然し一般に云われている所では、真面目、勤勉、学問にも仕事にも熱心、研究心旺盛、情が深い、等が長所として挙げられているが、その反面、狭量、負けず嫌い、理窟ばい、斗争性が強い、じみ、などの欠点が指摘されている。これはどういう調査データによつて結論されたものか知らないが、信州人としての私を内省して見ると、これらの長所欠点といわれるものが殆んどすべてはつきり自覚され、我ながら驚く程である。そこで知名の信州人について乏しい知識によつて若干考察を加えて見た。その結果はどうも一般にいわれている所が真実に近いような気がして来た。例えば誰でも知っている一茶や藤村などは、前述の長所や欠点のあるものを特に鮮明に示しているように思われる。私は俳句については全くの門外漢であるが、それでも一茶の晩年作といわれる「われと来て遊べや親のない雀」や、「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」、「瘦せ蛙負けるな一茶ここにあり」、「なんのその百万石も笹の露」などに見られる弱者に対する強い同情心や反骨の反面、財産争いからんで絶えず訴訟を起していたといわれるような点は、前記の信州人氣質を遺憾なく発揮したものと見られ、一茶こそ典型的の信州人であつたのではあるまいかとの感を抱かせるものがある。藤村についても私は別に深く研究したわけではないが、その作品から受ける感じは、藤村のじみで真面目で、孤高な性格がにじみ出ているように思われ、どことなく信州人という雰囲気が濃厚に附随しているように感ずる。詩人以外の知名人でも信州人氣質は様々な形をとつて現われているようだ。信州人には学者や司法官で知名の人は多いが、清濁併せ飲む太腹の大政治家というものは全く出ていない。これは信州人氣質といわれる諸特性を考えれば、至極当然のことと理解されよう。嘗つては財界人にも知名の人は少なかつた。岩下清周や藤原銀次郎などが想い浮ぶに過ぎない。然し最近では屢々ジャーナリズムを賑わした五島慶太、小川栄一などの特異の人物が現われてい

る。これらの人物の活躍振りから見ると、信州人気質の特徴を良いにつけ、悪いにつけて最も強烈に且つ鮮明に表わしたものの如く感じられる。

このようないわゆる信州人気質なるものは、どうして出来上つたものであろうか いろいろ愚考してみるに、その要因は第一に地理的、歴史的背景にあると断ぜざるを得ない。信州は四方を高い山に囲まれているばかりか、その内部でも五つの盆地は急峻な山岳によつて相互に隔絶されている。しかもこれに高山地帯特有の峻烈な気象も加つている。他方において遠い上代は別として、少くとも戦国時代以降においては、信州全般を支配する一大勢力がなく、各盆地には土着の小豪族が割居して、天險を楯として寸尺の地も譲るまいと相互の交通をはばみ、独自の政治的形態を築き、物資に恵まれない土地に、努力によつて独立経済を築き上げ、独立自尊の誇りを維持するに汲々として来た。徳川封建時代になつても、分割支配に最適の地勢と天領などの支配方式を加えて、戦国時代以来の気風をそのまま持越して来たものと思われる。こう云つた条件が信州人気質の狷介性や負けず嫌ひ、斗争性、勤勉性その他の特性を形成するに至つたものと考えて差支えあるまい。

然しながらこのような条件は、交通が発達し、人も文化も交流の激しくなつた現代において、依然存続し得るとは思われぬ。従来、信州人気質も今後大きな変化を遂げることが予想される。それを私は大きな興味をもつて、これからゆつくりと観察して行きたいと思つている。

信州人気質が以上の如く地理的、歴史的環境によつて形成されたとすれば、環境が人を作る力というものは絶大なものと考えねばならない。このことは直ちに教育と環境の関係という点を想起させる。教育というものが人間形成を主目的とする以上、人間形成に絶大な力を有する環境というものを無視してこれを行うことは許されない所であろう。従つて教育に与る者が、夫々の被教育者のおかれてある環境を十分に分析し把握して、環境の力を教育目的の達成にフルに活用し、或は目的に合うように計画的に環境を改変するということが、当然の手段とならねばならない。こういうことについての具体的研究はなされているのであろうか。私も教育にたづさわる者のはしくれであるが、こんやの白袴で、まだこのような研究や、その実際の活用の話を聞いたことがない。誰かこの方面にくわしい人があつたらお話を承りたいものと思つている。